

NEWSLETTER#110

地区例会報告

- p.1 2016 第2回関東地区例会.....梅田径
p.2 2016 第2回関西地区例会.....トン・クン・フォン・ベニー
p.4 2016 第3回関西地区例会.....太田健二・粟谷佳司

Information

- p.6 会員の output
p.6 事務局より

2016 第2回関東地区例会 梅田径

書評会『マス・メディア時代のポピュラー音楽を読み解く：流行現象からの脱却』

日時：9月17日（土）14:00-18:00

於：立教大学池袋キャンパス 14号館D402号室

登壇者（以下敬称略）

著者：東谷護（成城大学）

評者：大山昌彦（東京工科大学）、久野陽一（青山学院大学）、瀧戸彩花（立教大学大学院生）

第2回関東地区例会として東谷護『マス・メディア時代のポピュラー音楽を読み解く：流行現象からの脱却』（勁草書房、2016年2月）の書評会が開催された。

まずは東谷氏による簡単なレクチャーから始まった。テレビの音楽番組が力をもったマス・メディア時代がどのように形成されていったのか、その歴史的な展開について「流行」の一言に回収されない文化的な文脈を発掘していく必要があることを述べられ、それらを実証的に論じた本書の意義が改めて説明された。

続く瀧戸氏の発表では本書を歌詞分析と作詞家や米軍基地で活躍したバンドマンたちライフストーリーによる二つのテーマから構成されると読み、両者をつなぐ基礎的な研究手法としてインタビュー調査があることを指摘した。しかし、インタビュー調査による歌詞分析では作家自身の意図が直接裏付けられる利点があるものの、インタビュアーの立場や調査者のコンテキストが関わってしまう危惧を表明された。より具体的には、若手研究者や学部生が大物作詞家とアポイントをとる事は難しく、また様々な契約や配慮によって必ずしも正確な事実だけを話してくれない可能性がある。また、インタビューだけでは言語化できた部分しか分からず、非言語的なコミュニケーションへの注意も必要ではないかとコミュニケーション理論の立場から述べられた。

久野氏は、英文学における六十年代以降の批評理論の展開を整理した上で、本書冒頭で言及されているブライアン・ロングハーストのポピュラー音楽研究のフレームにおけるText概念に注目し、文学におけるテキスト概念と音楽におけるサウンド概念がどの程度通用あるいは相違するのかという問題を提起した。そし

て、東谷氏の歌詞分析がインタビューを基盤とした作家作品論に留まっていまいかと疑問を呈示した上で、インタビュー的手法ではないテキスト分析を行うことで、新しい歌詞分析の方法論が見いだせるのではないかと投げかけた。

大山氏は本書全体の内容を概観し緻密なインタビューと表現の意図を分析する手法の有効性を認めた上で、阿久悠のような大作詞家が登場しなくなった現在と八〇年代以前の音楽環境の相違が十分に扱われていないことを問題としてとりあげた。阿久悠は一九八五年以降のヒットを放っていないが、それを五十歳を越えた事で自身の考え方が変化した事が原因であると本書のインタビューでは答えている。大山氏はそれをハワード・S.ベッカーのアート・ワールド概念を援用しながら、音楽を取り巻く環境の変化によって大作詞家が生まれにくくなってきた音楽環境の変質に注意するべきではないかと指摘した。

質疑応答は東谷氏が評者たちの疑問に答える形で始まった。インタビュー調査にあたっては正確なルートで適切なアポイントを取る必要があるものの、正式な手続きを踏めばインタビューを受けてくれる人物は多くおり、複数回のインタビューを行うことで作家へのインタビューにも強い妥当性が生まれることを論じた。歌詞分析やインタビューに関することを取り上げる一方で、後半のライフストーリーに関する部分が評者たちにあまり取り上げられなかったことに驚かれてもいた。その点については、インタビューの記録は追証が難しく、反証可能性が低く書評でも取り上げにくいことが論じられた。質疑後半では、現代における作家を取り巻く状況についての議論が展開されたが、大山氏が提起したマルチメディア時代におけるアート・ワールドの変容を捉える視点は検討される価値があるだろうと思われる。

また、東谷氏のライフワークの一つである米軍基地での音楽活動について、米軍基地で活動していた演奏者たちが後にテレビで活躍するようになるその連続性に注意するべきであるという議論は、マスメディア時代からマルチメディア時代への変容を迎えつつある我々にとっても大きな示唆を与えるものであった。

参加してつくづく痛感したが、書評会とは著作の可能性を越えて様々な議論の契機となる場である。この短い報告にとどまらない豊かな内容があり、学術書を作るための秘訣が披露され、書き切れないほどの議論が展開された。惜しむらくは参会を遠慮された方が少なからずおられたようであり、フロアが若干寂しく感じられた事である。書評会は本についての議論だけではなく、様々な文化現象を論じるための技術や手法を検討する場でもある。書評会でしか聞けない重要な事柄も多かった。そこにどれだけ学ぶことが多いことは贅言を要すまい。

(梅田径:早稲田大学日本古典籍研究所)

2016 第 2 回関西地区例会 トン・クン・フォン・ベニ ー

書評会：トマス・トゥリノ『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ—歌い踊ることをめぐる政治』

日時：2016年8月30日（火）14：00-17：00

**於：関西大学千里山キャンパス第3学舎C404教室
登壇者**

訳者：野澤豊一（富山大学人文学部准教授）

評者：谷口文和（京都精華大学ポピュラーカルチャー学部専任講師）

：秋山良都（大阪大学大学院文学研究科博士課程）

司会：輪島裕介（大阪大学大学院文学研究科准教授）

進行：太田健二（四天王寺大学人文社会学部准教授）

2016年第2回関西地区例会は、8月30日（火）、関西大学千里山キャンパスにおいて開催された。

今回の例会は、トマス・トゥリノの著書『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ—歌い踊ることをめぐる政治』についての書評会であった。趣旨は、本書の内容、概念枠組みと学術的な位置づけの検討を通じて、音楽研究への価値と応用を考察することである。

書評会は、まず訳者の野澤氏による著者と本書の内容紹介から始まった。著者のトゥリノは、1951年アメ

リカのニュージャージー州に生まれ、民族音楽学者および文化人類学者である。ペルーの高地やジンバブエでのフィールドワークと自身のオールタイム・シーンのバンジョウ演奏の活動に基づいて、本書を執筆した。本書では、この二つの音楽実践の場とナチス・ドイツや公民権運動における音楽の事例を参考にしながら、日常生活の中の音楽の意義を、美学ではなく、一般の人々が参与・鑑賞するわざ（アート）として捉える。特に、音楽文化を統一的に論じるため、音楽を「参与型音楽」、「上演型音楽」、「ハイファイ型音楽」と「スタジオアート型音楽」という4つの種類に分類し、新しい分類の枠組みを提案する。トゥリノはこうした枠組みと事例の理解を通し、「文化」と「個人」の密着性や、参与型音楽による人間の集団の形成とその政治性を主張し、音楽すること（musicking）とはどういうことかを考察する。野澤氏は、本書の平易で啓蒙的な語り口と文明批判、新自由主義批判を高く評価した。同氏と西島千尋氏が先に翻訳したクリストファー・スモールの『ミュージッキング』と同様の狙いを持ち、理論的な厳密さに欠ける点も多少あるものの、より実用的・実践的な書物であると総括した。

次に、谷口氏は本書の学術的な位置付けと概念枠組みに関する議論に注目し、その適切さと応用可能性について論じた。本書の学術的な位置付けは20世紀後半からの民族音楽学の理論的な展開に位置付けたうえで、音楽を社会的な営みの一種として扱い、直観的なものととらえられがちな音楽経験（没入、一体感など）を議論に加え、あらゆる音楽文化を包摂できるような形で概念枠組みを設定する著作と捉える。谷口氏は、本書における音楽の分類について詳しい説明を行った。まず、「参与型音楽」と「上演型音楽」をライブ・パフォーマンスの音楽として設定し、「参与型音楽」の参与性への重視と「稠密的」なサウンド（パート区別できない）と、「上演型音楽」の聴衆と演奏者の隔離と「透過的」なサウンド（パート区別できる）の違いを紹介した。また、「ハイファイ型音楽」と「スタジオアート型音楽」をレコード音楽に分類し、「ハイファイ型音楽」のライブ・パフォーマンスの表象としての性格と、「スタジオアート型音楽」の電子技術の示す近代性に志向するレコードでしか存在し得ない

音楽作品の制作の違いも強調した。谷口氏は著者の「参与型音楽」への関心が過剰にみえることを指摘し、それを相対化するために、著者が紹介した4つの分類のより多様な組み合わせの可能性を提唱した。特に、本書で紹介されたスクエアプッシャーの例を見直し、「スタジオアート型」から「参与型」へ、という単線的な図式を超えて、4分類を横断するスクエアプッシャーの多彩なパフォーマンス形態を指摘した。したがって谷口氏は、本書の実用性について、参与型音楽の素朴な称揚に落ちないような理論的な柔軟性を持つと評価しながら、分類するよりも、音楽実践において各領域がいかに組み合わせられているかの分析のほうが有意義だと主張した。

続けて、秋山氏は自分のドイツにおけるポザウネンコア（Posaunenchor）に関するフィールドワークを通し、本書の「参与型パフォーマンス」の枠組みを用いた音楽研究の可能性を問うた。秋山氏は、これが必ずしも目新しい考え方ではないが、ジャンルの枠組みを超えた音楽研究のために有効なものである、と指摘した。ポザウネンコアと自分の研究背景の紹介を経て、ポザウネンコアにおける音（Klang）とその価値観を紹介した。本書の論点から、バンドメンバーの演奏スキルのレベルの差異とそこから生じる曖昧なチューニングに注目し、とりわけ演奏を通じてメンバーが「ゲマインシャフト」（Gemeinschaft；共属感情）を感じることを重視した「社交」として音楽づくりが為されていると考えられる、とした。また、メンバーのバンド運営に対する努力や教会共同体との連携については、本書で説明されている「参与をめぐる政治」に関係していると述べた。秋山氏は、本書における「参与型パフォーマンス」の概念、特にその感情的と身体的経験の過程への注目が、音楽における「参与」、とりわけその身体的と感情的な側面にまた向き合うことを可能にすると主張した。ただし、野澤氏と同様、秋山氏は本書の理論的な側面の曖昧な部分を指摘し、「参与観察」という研究方法を通じて、音楽実践についてどのようなものが明らかにできるかという問題がまだ残っていると述べたが、本書の「理論的入門書」としての価値はその問いを深化させるものであると主張した。

フロアディスカッションでは、本書の研究と教育実践への導入に向けた、実践的と理論的な質問がなされた。まず野澤氏は、著者の執筆の目的が次世代にメッセージを残すということを強調した。したがって本書で扱われた事例は消滅しつつあるローカルな儀式・儀礼的な音楽づくりが中心となり、野澤氏はこうしたアプローチに好意的に評価した。

4分類の枠組みにおける電子技術とライブ・パフォーマンスへの態度に関する質問もなされたが、それが根本的に作り手の意思の問題というよりも、聴取者の聞き方の問題であると、谷口氏は説明した。谷口氏は京都市左京区で活動しているロックバンドの音楽実践を紹介し、日本の例に対する本書の枠組みの適応性も考察した。ただし、本書では分類化する方に傾向しているのに対して、日本の音楽実践においては各領域の多様な組み合わせが見出せることを強調した。

秋山氏が触れた身体的と感情的な一体感における音楽の重要性と特徴に対する質問もなされた。秋山氏はボザウネンコアのメンバーの発言を引用し、「ボザウネンコアにやってくると、いつの間にか日中のストレスから解放されて、いつの間にかボザウネンコアのメンバーの中に入って挨拶を交わし合い、それがいつの間にか音楽に変わっている」と述べた。だが、なぜ音楽実践でその一体感が達成されているか、また他の行為では達成できないか、という2つの難しい質問に直面する。野澤氏は、音楽実践と社交的行為の境界は曖昧な場合があるため、音楽研究に関する参与観察調査は重要だと主張しながら、それに関して秋山氏は、その方法から生じる問題関心について反省的な考察も必要だと述べた。

最後に、翻訳題名が英語のカタカナ表記であることに関連させて、本書の翻訳過程において「social」という単語と概念の扱いに関する質問もなされた。

「social」という概念の定義を巡って、集団の成立と維持にはどのような過程と関係性が含まれているかが議論された。特に、司会者の輪島氏が本書の「social」を「社交」とし、題名を『社交としての音楽』とすべきではなかったかと述べたのに対して、野澤氏と谷口氏が「social」の含意をめぐって意見を述べ、さらに、「音楽に没入」するときには「社交性」は存在してい

るのか、という疑問を呈し、本書における「社会」(society)の概念の曖昧さが明らかになった。この曖昧さは、「参与」や「社交」という概念の応用性に影響している。したがって、「social」をカタカナのままですることのメリットもあるのではないかとこの意見もあった。

本書は理論的な厳密さにおいては問題もあるが、論点の明瞭さという音楽の政治性への啓蒙といい、大学における音楽学の教育実践と研究には貴重な文献になるであろう。今回の書評会をはじめ、これからの本書を巡る議論の展開を期待したい。

(トン・クン・フォン・ベニー オーストラリア国立大学・大阪大学 国際交流基金日本研究フェロー)

2016 第 3 回関西地区例会 太田健二・粟谷佳司

修士論文構想発表会

日時：10月22日(土) 14:00-17:00

於：関西大学千里山キャンパス第3学舎1号館3階 A305 教室

報告者：

黄慧 (関西大学大学院社会学研究科 M2)

余沛沛 (関西大学大学院社会学研究科 M2)

黄 慧 (関西大学大学院社会学研究科M2)

「KPOPの日中における受容一日中のファン文化はどのように作られたのか」

グローバルな展開を積極的に図っているK-POP。日本と中国において、そのファン文化はどのように形成されていったのか。作り手とファンとの相互作用から、その相違を明らかにする本研究。規範的で集団主義的な日本ファン文化に対し、中国のそれは、カオスで個人主義的な特徴が描出された。

たとえば、日本ではK-POPの公式ファンクラブが存在するが、中国では少なく、非公式なものが多い。それはコンサートチケットの入手方法にも関係する。日本では抽選によって全席指定されるが、中国ではエリアによって料金が異なり、先着順に自由に座席が指定できるため、「同担」のグループで占有することができる。

また、グッズの面でも、日本では公式グッズがコンサート会場で販売されるが、中国では公式グッズが少なく、ファン自ら非公式グッズを制作し、販売することもあるという。

このような違いを、単純に国民的な特徴に帰するのではなく、音楽研究としてどのようにとらえるべきなのか。たとえば、従来のファン研究ではファンの方に焦点が当てられることが多かったが、この場合、作り手側（つまりK-POP）の戦略も重要になる。実際、K-POPアイドルが日本語や中国語で歌ったり、外国人メンバーとして日本人や中国人を起用することもある。あるいは、日中の文化政策の違いとしてとらえる側面もある。つまり、日中のK-POPファン文化を形成するアクターは、作り手とファンだけではなく、さまざまな主体が複雑にかかわっているともいえよう。とりわけ、日本と中国のふたつの国々にとって、K-POPという韓国＝他者の音楽文化が輸入され、形成されるファン文化の複雑さをどのように論じるのか。それが本研究の課題となるだろう。

（太田健二）

余沛沛（関西大学大学院社会学研究科M2）

「中国におけるインディー・ロックシーンの形成——ライブハウス、ソーシャルメディアの役割を中心に」

本報告は、中国のインディー・ロックを「3つの音楽シーン」や「オルト・エリート」の概念を応用しながら考察したものである。

報告では、まず中国の音楽の歴史が述べられ、その中で2000年代に入ってから音楽興行も本格化し海外アーティストが来中することにより、国内でもライブハウスなどのロックミュージック専門の会場が建設されるようになったという。ライブハウスは、2015年までに154軒ほどに増加したということである。そして、ライブハウスの経営者やミュージシャンは、SNSを利用することでファンたちも巻き込み、インディー・ロックの受容が時間と空間の制限を超えたという。

ここで報告者は、このような音楽状況を捉えるために、理論的枠組みとしてベネットとピーターソンの「3つの音楽シーン」と遠藤薫氏の「オルト・エリート」概念を応用しながら、北京を中心とした中国のイ

ンディー・シーンを分析していった。そして、先行研究の検討やフィールドワーク調査に基づいて、「3つの音楽シーン」概念から、「Local scene」を90～2000年、「Translocal scene」を2000年代、「Virtual scene」を2000年代後半から現在、というように分類した。

「Local scene」の時期では、90年代ごろにはまだライブハウスは存在せず、ライブバー、コーヒールーム、本屋などで金土日にライブを行っていた。そして、当時の代表的な雑誌として『通俗音楽』を読み、北京ではインディー・ロックが好きな人は洋楽を聴いていた。アルバム入手方法は、「cracked cd」という再生に影響しないようにCDに傷をつけたもの、すなわち商品ではないものとしてのCDをショップで購入し仲間と出会うチャンスを作っていた。「Translocal scene」では、北京を中心としながらも、ライブハウスが全国に出来ることによってファンとミュージシャンの移動が普通になり、インディー・ファンの人間関係ネットワークが形成されるようになった。そこでは、地域によって「固定的なコア人物」と「場所」が存在すると指摘した。そして「Virtual scene」では、インターネット及びソーシャルメディアの利用、あるいは「ハッカプラン」というヨーロッパにおける中国人留学生たちのネットワークによって、中国のインディーバンドとヨーロッパのライブハウスを結びつける動きなどが見られるということであった。ここで報告者は、このようなインディー・ロックに関わる人物を「オルト・エリート」の定義から位置付けている。

質疑では、「音楽シーン」を北京のインディー・ロックに当てはめて考えるときの理論的な問題や、ここで聞き取りを行った関係者は北京においては「エリート」と位置付けられる側面もあるのではないか、というような意見も出された。報告は、現代中国におけるインディー・ロックの動きを関係者へのインタビューと「音楽シーン」「オルト・エリート」概念から考察しているもので、中国のポピュラー音楽文化を考える上でも示唆的なものであったと思われる。

（栗谷佳司）

会員のOUTPUT

平石貴士・著

「日本のポピュラー音楽の界の構造分析 ―多重対応分析を用いた構造の客観化―」

『立命館産業社会論集』第52巻第2号

(立命館大学産業社会学会 2016年9月発行)

◆ information ◆

理事会・委員会活動報告

■ 理事会

2016年第3回理事会(持ち回り)

(10月12日議題送付/10月26日回答締切)

議題1 前回議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

議題3 退会者の承認

2016年第4回(顔合わせ)理事会

2016年12月2日 於 立教大学池袋キャンパス

議題1 前回議事録案の承認

議題2 退会者の承認

議題3 2016年度末での7条退会候補者について

議題4 各委員会報告

議題5 総会資料の確認(議題、前回議事要録案、学会活動報告、会計報告など)

議題6 総会での役割分担(総会議長候補の選出)

議題7 刊行物(これまでのものも含む)の国会図書館寄贈

議題8 大山理事のサーバー費用立替えについて

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol. 1～Vol. 11のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGEにおきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jasmpms1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在するVol. 11までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております(ただし送料はご負担いただきます)。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方(非学会員の方でも結構です)は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていないVol. 12以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちでJASPMの活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から1000字から3000字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは86号(2010年11月発行)より学会ウェブサイト掲載のPDFで年3回(2月、5月、11月)の刊行、紙面で年1回(8月)の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDFで発行されたニュースレターはJASPM ウェブサイトのニュースレ

ターのページに掲載されています。

(URL : <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

2013年より、8月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様にPDFにより掲載しております。

次号(111号)は2017年2月発行予定です。原稿締切は2017年1月20日とします。また次々号(112号)は2017年5月発行予定です。原稿締切は2017年4月20日とします。

2011年より、ニューズレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿の送り先はJASPM広報ニューズレター担当(nl@jaspm.jp)です。お間違えなきようご注意ください。ニューズレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局(jimu@jaspm.jp)まで郵便またはEメールでお知らせください。

ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせはEメールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

JASPM NEWSLETTER 第110号

(vol. 28 no.4)

2016年 12月 20日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 細川周平

理事 粟谷佳司・井手口彰典・大山昌彦・

小川博司・東谷護・長尾洋子・

伏木香織・輪島裕介

学会事務局：

〒565-8532

大阪府豊中市待兼山町1-5

大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室

輪島裕介研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士

